第四節　當代淨瑠璃の形式

當代淨瑠璃の形式的方面は、その中心年代たる寛文年間に於ては、大體に於て前期と大同小異であつたといつてもよい。尤も、淨瑠璃の流行熱はこの期間に至つて俄然勃興して、正本の刊行は甚だ多く、その版式も順次改善せられて、遂に八行本の出現となり、ここに淨瑠璃正本としての樣式は、この期の終りに於て完成を見るに至つたのである。而してその文章は、やはり前代の傾向を承けて、古雅なお伽草紙や、勁健な幸若舞曲の脈を引いたものもあるが、京都を中心とした軟派の作品には、說經の影響を受けたものも少くない。殊に、この方面の代表者ともいふべき山本土佐掾の語物にそれが多く、宇治加賀掾に至つては、謠曲の影響を少からず受けてゐることは既に述べた通りである。併し大體に於ては、描寫よりは敍述、人情の機微を穿つよりは神變不可思議を述べるに力を用ゐ、勇力快神を說くに急なる傾向のものが多い。

しかしてその各段は、「さても其の後」「さて其後」「これは扨置き」「さる程に」「かくて其後」「さる間」といふやうな極り文句によつて起して、「目出度しともなか〳〵申すばかりはなかり

けり」とか、「あつぱれ激しき戰やと感ぜぬものこそなかりけり」とか、「物のあはれの至極なり」とか、「ぬらさぬ袂はなかりけり」とか、「千秋萬歳めでたしとも申すばかりはなかりけり」とかいふ極り文句を以て結び、しかも文中にも、「すさまじかりける次第なり」とか、「あはれといふも愚かなり」とかいふ文句を所々に挿入して居るといふのが、殆んど共通の型式である。そして文章も個々の場面を描くよりは說話・事件の筋を運ぶといふ方に重きを置いた物語風である。又その結構も六段組織のものが多くて、その段取りの方法は前期と大同小異であつた。殊に江戸に於ては、この六段組織は元祿期まで行はれたといへる。然るに上方に於ては、寛文末に於て五段組織が現れて、延寶・天和・貞享に至つては殆んど全部五段となるに至つた。これは大いに注目に價する形式上の變化である。故に、今この點に關して少し考察を加へて見ようと思ふ。

抑〻古淨瑠璃は、例の寛永二年版の『たかだち』の五段組織であるを除いては、その他のすべては六段組織であつたのに、寛文年間に至つて五段組織の作品が現れるに至つた。現存の正本について見るに井上播磨掾の『四天王高名物語』（寛文二年）、『釋迦八相記』（寛文九年）などに至つて五段組織を見るが、是等を始めとして古淨瑠璃の末期に及んでは、五段組織の物が次第に多く現

れて來た。そして井上播磨の正本にも六段物以外に五段物も少くなく、山本土佐掾に至つては現存の正本は殆んどすべて五段であり、更に宇治加賀掾に及んでは、六段物は一篇もないといふことになつて、上方に於ては、古淨瑠璃の末期に及んでは六段物は跡を絶つたのである。故に今これを作者側から見れば、淨瑠璃戯曲の大成者たる近松の作には、始めから六段物は一篇も無い事となる。かくて「六段物」といふ言葉は、古淨瑠璃の代名詞にさへ用ゐられる程になつて、淨瑠璃の六段と五段との差は、新舊を區劃する一つの組織上の目標とさへされる程になつた。

然らばこの差はどうして生じたか、單に六段を一段減じた結果であらうか、或は他に理由があつたらうかについては、今尙、定說はないやうであるが、私は戯曲的に見て組織上の重大なる變化であると考へる。蓋し古淨瑠璃の六段組織は、例のお伽草紙の系統に屬すると見られる表現樣式である、敍事文學の系統に立つ『十二段草子』の十二段を半減して六段に緊縮したものであるとの昔からの說もある程で、自然、文學の系統上から見ても、敍事文學・散文本位の十二段の系統を引いた物語風を本體としたのであると考へられる。之に對して五段組織は、能、の番組に倣つたといはれる點に大切なる暗示があるので、結局、物語風・草子風であつた淨瑠

璃の組織様式を、劇的組織に改めたものであると解釋すべきであると思ふ。

抑も劇詩、殊に悲劇がその形式として事件の發端たる序から葛藤を經て、最後の解決に至る三大道程を取り、而してその葛藤の中には、更に葛藤の昂進と最高潮と轉向とを要し、結局、五段(五幕)より成るとの說は、獨り西洋劇詩に於てのみ言はるべきではなくて、我が國の劇に於ても、その整つたものは、大抵この道程を踏んで居る。而もこれは近世の劇についてのみならず、既に彼の能の大成者たる世阿彌が、この眞理を道破して居るやうに、能も亦この組織を基とするのである。世阿彌に從へば、一番の能は序・破・急の三段より成り、その破の中には更に序・破・急があると言つてゐる。これは雅樂の樂曲が序・破・急から成るといふ、その構成法から得たものであらうが、これを能の組織にも適用したところに、世阿彌の劇作者としての手腕と見識とも見るべきである。今一例を『隅田川』に取つて、これを表示すれば次のやうになる。

ワキ名乘
ワキツレの出、名乘、道行
ワキとワキツレとの問答
〔序〕
動機

シテの出、述懷
シテとワキ問答（破の序）
シテ乘船
ワキ語（破の破）〔破〕
シテ・ワキ問答
シテ愁歎
念佛……（破の急）……轉向
幽靈出現
切●……〔急〕……解決

葛藤誘因
葛藤頂點

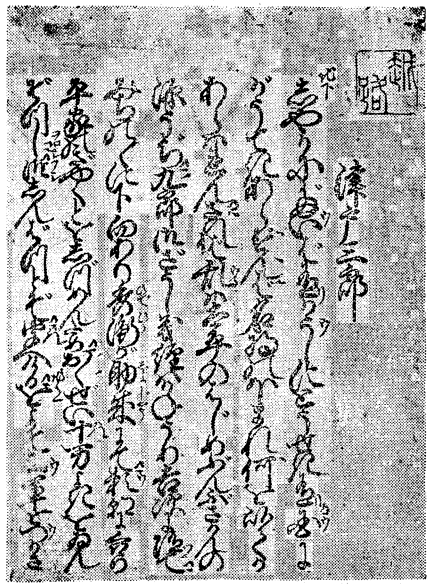
大體これによつて序・破・急、及び破の序・破・急、卽ち五段から成ると見られるが、それは動機から葛藤の三段を經て、解決への道程も大體に於て踏んでゐると考へ得られる。

これは一曲の能についての解剖であるが、更に眼を轉じて演能の番組を見るに、彼の神（脇能、神事能）、男（修羅物）、女（鬘物）、狂（物狂・現在物＝復讐・世話物）、鬼（鬼物・天狗物・太刀打物）といふ順序は、無意味に配列せられたものではなくて、ここにも亦、劇の五段の體制が相當に前後の聯絡を保つて用ゐられてゐることを知る。卽ちこれを表示すれば左の通りになる。

神（神事能）…高砂、三輪、弓八幡……〔序〕
男（修羅）…（田村、八島、箙、忠度、清經、巴、兼平）…（破ノ序）
女（鬘物）…（熊野、松風、羽衣、井筒）…（破ノ破）〔破〕
狂（狂女物、現在物）…（角田川、三井寺、櫻川、望月、鉢木、仲光、七騎落）…（破ノ急）
鬼（鬼畜、太刀打、天狗物）…（土蜘蛛、紅葉狩、正尊、夜討曾我、鞍馬天狗）……〔急〕

この順序を追つて一日の能が演じられて、ここに演能の目的が達せられるのであると思ふ。

淨瑠璃の五段組織が、件の能の番組に倣つたものであるとの想察は、その整つたものの組織を解剖しても明かであるのみならず、既に『竹豐故事』も亦これを明示して居る。即ち同書に、「淨瑠璃を五段に綴るは能の番組に同じ、初段は脇能、二は修羅、三は葛事、四は脇所作、第五は祝言なり、大體これに表せるものなり」と言つてゐる。尤も、能の番組に倣つたとはいへども、その内容に至つては、必ずしも能の神・男・女・狂・鬼といふ標準を忠實に守つてゐたわけではなく、この格を守りつつ格を破つて、淨瑠璃特有の組織をしたものが多く、翻案などによつて巧にそれを掩ひ隱して、一見同じとは思はれないやうになつて居る。今これを明かにする爲に、古淨瑠璃中比較的整つてゐる『門出八島』を例に取つて、その解剖を試みて見よう。



「津戸三郎」（烏八出門）丁初本正

本曲はもと山本土佐掾の正本として、貞享頃に作られたもので、作者近松の青年期の作品中の佳作の一に擧げられる。元祿二年刊行の義太夫の正本『津戸三郎』はこの外題替であつて、作中の主要人物の一人たる志田三郎を津戸三郎に改め、且つ大團圓を少し改作してある。『平家物語』の繼信最期の條を主眼として、之に繼信の妻の夫に對する愛著の情、淨土往生の信仰などを取合せて脚色したかに思はれる。全篇五段より成る。その各段を簡單に表示すれば次のやうになる。

初段
- （大序）志田庵室の段
- （切）氏神社頭の段、
  - （口）兄弟の從軍爭ひ
  - （切）庄司の教訓

序（動機）（伏線）

神

安西彈正

二段目
- 八島陣營外の段（口）
- 義經出陣（中）
- 八島戰場…繼信身代り（切）

葛藤昂進　修羅

三段目
- 戰場跡の夜景（口）
- 義經陣屋…繼信最期（切）

高潮　愁歎

四段目
- 庄司館（口）
- 道行
- 八島の庵室（切）

轉向　幽靈　狂

五段目…黑谷供養…成佛…解決祝

即ち初段は、義經及び佐藤兄弟の出陣、安西の配合など全篇の序であり、動機であり、伏線が設けられて居る。そして神前の場に神事能の翻案が見える。第二段は、繼信の身代りを頂點とする葛藤の昂進の段であつて、正に能の修羅に當り、第三段は、繼信最期を山とし、やがて全篇の眼目となつてゐる愁歎場で、能の女物の哀傷を男物に轉じてあるとも考へられる。第四段は、場面を轉じて佐藤の留守宅に歸り、道行から鷲尾の姉の庵室に於ける夢幻的の場面とな

つてゐるが、ここは狂女物の翻案とも考へられ、又ワキを中心とした場面である。そして第五段に及んで、一切は目出度く解決するといふ組織になつてゐる。

敍述の樣式には頗る物語風の脈があり、宗教的靈驗の場面を以て大團圓とする行き方など、正に古淨瑠璃の範圍に屬するものといふべきであるが、段取りはよく整ひ、而も通つて居り、場面の變化もあり、人物もよく活動して、能の五段組織に倣つて、よくこれを翻案して淨瑠璃化して居る點など、正に近松青年期の代表的佳作であると共に、形式的に見ても、實に古淨瑠璃時代の最後を飾る出色の作柄で、次の元祿期の淨瑠璃の先祖をなしたものと謂ふべきであらう。

第五節　當代浄瑠璃の内容

一　正本刊行の活況

江戸に於ける明暦の大火を境界として、浄瑠璃本の刊行は一大飛躍をなした觀があるが、これがやがてまた浄瑠璃の流行に伴ふ當然の現象であつたといふべきで、年々多數の正本が刊行されたのである。尤も寛永から慶安・正保頃までの前期に於ては、正本刊行は江戸では殆んどなく、江戸の流派のものも上方で行はれた程で、その主なるものとしては、上るりや喜右衛門（さうしや喜右衛門、鶴屋喜右衛門）、草紙屋九兵衛、さうしや長兵衛、とら屋左兵衛等であつたが、明暦から寛文・延寶頃に及んでは、この中の正本屋九兵衛（山本）が最も多くを刊行し、之については八文字屋八右衛門、鶴屋喜右衛門が多く、出版された浄瑠璃の大多數はこの三大出版元から出たといつてよい。之に對して江戸に於ても、明暦三年五月（正月十八日大火）に、『咸陽宮』がもすやで刊行されたのを始めとして、同四年には『宇治の姫切』が、版木屋又右衛門から出

た。それから次第に出版の機運が盛んとなり、鱗形屋が主となつて、多くの正本が刊行される事となつた。

その形式は、古くは小形繪入上下二卷仕立であつたが、寛文に入つては、多くは一卷で中形黑表紙、又は丹表紙で、紙數は大抵十七丁、繪入細字で、他の假名草子などよりは、一段と大衆向きのものであつた。既に前にも述べたやうに、寛文年間までは節付は殆んどなかつたが、延寶年間以降は、井上播磨の正本を始め、各流皆繪入細字本に節付を施す事となり、更に八行大字の正本が刊行され、これに中形本の外に大形の上製本も出來るやうになつて、いよいよ刊行物としても向上する事となり、この樣式は長く傳はるに至つた次第であつた。

二　內容の概觀

扨て、かくして年々盛んに刊行を見るに至つた當代の淨瑠璃は、これを流派別に見れば前述のやうであるが、更にこれを一括して、先づ題材的の方面から概觀すれば、平安時代の古典を始めとして、軍記物・本地物・謠曲・幸若・說經より下つては、お伽草紙から、更に時としては巷話や遊里の生活などの如き世話物までもその詩材となつて居るといふ有樣で、古淨瑠璃の

全盛期、殊に末期なる延寶・天和頃に至つては、これより以前の資材はざつと一應あさり盡された觀があつた。

尙この點について少し例をあげて見よう。

（一）　古典を材題としたものとしては、古くは神武天皇の御東征を脚色して『日本王代記』を始めとして、平安朝時代の事蹟に材料を求めた、『平安城都遷』『道風額揃』『和氣清麿』『源氏供養』『花山院后諍』『伊勢物語』『赤染衛門榮花物語』道眞を材とした『虎の卷』、『惟喬惟仁位諍』『業平一代記』（寛文十年）等擧げ來れば

加賀掾正本「和氣清麿」卷首

その他多く、更に下つては、『つれ〴〵草』『龜谷物語』の如き吉野朝時代の『つれ〴〵草』や『方丈記』の如き古典に材を求めたものすらある。これ等は多くは井上播磨、又は宇治加賀掾の如く、本期の末に上方に於て榮えた流派の語物に多い。

（二）　これに對して戰記物は廣く各流派に用ゐられてゐることは自ら、既に前に各流派別に列擧した正本によつて明かであらう。

（三）　さらに、本地物はどうかといふに、上方の流派中、殊に軟派たる山本土佐掾などの語物に多く見られることも亦既に述べた通りであるが、その他、丹波少掾正信の『愛宕の本地』（寛文年中）、『京今宮の本地』（寛文末か）、乃至流派未詳の『だるまの本地』の如きその一例である。

（四）　次に謠曲に材題を求めたものとしては、井上播磨の『紅葉狩』、『賴朝七騎落』等を始めとして、宇治加賀掾の作品に非常に多いことも亦同流の解説に於て觸れて置いた通りである。

（五）　尙ここに注目すべきは、今期に及んで謠曲との關係が非常に密接となつて、これに題材を求め、また結構趣向を借りたものが多くなつたのに對して、淨瑠璃の創始時代から前期にかけて相當に關係の深かつた幸若とはどうであるかといふに、これはその關係は謠曲ほど色々の方面に於て密接ではないとしても、題材的方面に於てはやはり相當にこの中からも採られたやうである。例へば井上播磨の『百合麿』岡本文彌の『ゆりわか高麗責』の如きは、幸若の『百合若大臣』に基いた作で、後の近松の『百合若大臣野守鏡』の原作となつたものであり、また歌舞伎の百合若物にも影響を及ぼし、山本土佐掾の『源氏烏帽子折』は『烏帽子』に緣故があり、土佐少掾正勝の『風流和田酒盛』は『和田酒盛』に基いて後の歌舞伎劇の『矢の根』に對して藍本を提供し、『景淸』は流派未詳の寛文十一年九月刊『景淸』に改作されて近松の

『出世景清』の粉本となり、井上播磨の『大職冠』も亦幸若のそれにより、それから歌舞伎の『面向不背玉』（元祿六年、早雲座、白石彦兵衛）や、近松の『大職冠』が作られたのである。そしてまた『信田』は山本土佐掾の『信田小太郎』に關係を有するなど、擧げ來れば決して尠くはないのである。

（六）　然らば說經との關係はどうかといふに、これ亦上方の軟派に於ては非常に密接であり、殊に山本土佐掾の語物に甚だ多いことは既に前に指摘した通りである。

（七）　お伽草紙との關係はそれ程ではないが、山本角太夫の『角田川』は『隅田川物語』に、『藍染川』は『あゐそめ川』（寛文年間刊）に關係があるが如きは、その一例として擧げることも出來よう。

（八）　更に世話・巷說などが取入れられて、當代味・當世風を加味した作の次第に現れたことも頗る注目すべく、この例としては宇治加賀掾の『靜法樂舞』や『七人びくに』に遊里を背景とし、遊女と嫖客とを資材とした場面が加へられたり、又は『三世二河白道』に高尾の事件、『末廣昌源氏』に八百屋お七を作り込み、また丹波與作なども題材とされて居るが如きこれであつて、この題材的方面について系統的に精しく研究することも亦興味あり、且つ大切なる一題目であると言つてよい。

次に內容上から見れば、創始時代から漸盛時代の傾向を受けた武勇物・靈驗本地物・人情物・戀愛物・お家騷動物等いづれも更に一段の展開をなし、複雜化を見るに至つた。

その中武勇物に於ては四天王物・判官物が依然人氣があるが、殊に今期に於て特に注目すべきは、子四天王物の變態たる公平物が、一時江戸を中心として飛躍的の發展をなして人氣を呼んだと共に、上方にも大いに影響を及ぼした事であつた。

また靈驗本地物は、殆んどすべての作品に、濃淡の差こそあれこの色彩が見えて、やはり古淨瑠璃としての特徵を示して居るが、一方に於て、開帳當込といふ興行的手段の加味された作が多くなつた。

それと共に本期の終りに及んで、殊に上方の軟派の正本に、平安朝時代の物語や謠曲に材を求めて脚色したものの中に、中世趣味の戀愛上の葛藤を主としたものや、又は戀愛至上主義的の人物などが取扱はれてゐるのは注目すべきである。

而してまた王代物には叛逆物が多く、武家物にはお家騷動を材題としたもの、又は敵討物が多いが、これ等も說經系の作柄のものなどと綯ひ交ぜられ、又は舞臺技巧上の必要から、非現實・超人間的の趣向などが盛んに用ゐられて、甚だ複雜な仕組となつたものが多いのである。

今これを武勇物・叛逆物・敵討物・宗教物・精魂物・人情物・戀愛物等に大別して些か考察批判を加へて見ようと思ふ。

三　内容の各説

（イ）武勇物

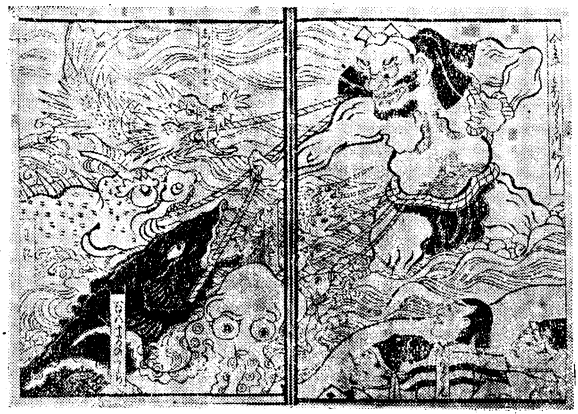
武人勇士の活動を中心または主材とした作品の總稱であるが、この中にさらに、次のやうな種類がある。

四天王物
公平物
判官物

このうち四天王物、又は子四天王物としては、その代表的作品たる『酒呑童子』、『頼光跡目論』『頼光北國落』、『四天王筑紫責』、『京今宮本地』、『四天王女大力手捕軍』等を始めとして多くの作品があり、またその中には、後に影響を及ぼしたものも少くないし、判官物も『門出八島』、『凱陣八島』、『源氏烏帽子折』、『天狗内裏』等を始め佳作が多く、その他『金剛山合

戰』、『山名神南合戰』、『東山殿子日遊』、『今川物語』等の如き太平記種や東山時代の物、乃至は『天草四郎島原物語』（寛文六年八月）等の如き近世の出來事を仕組んだのもあつて、その範圍も種類も甚だ多いが、そのうち本期の作として、最も特色のあつたのは金平物である。金平淨瑠璃はその內容上の系統から見れば、武勇物の一代表的作品である『酒呑童子』などによつて代表される四天王物の後日譚と稱すべき子四天王物の一變態的作品で、四天王の一人たる坂田の金時の子金平を主人公としたものである。その作意は勿論各篇同一でない事は言ふ迄もないが、大體の骨子となる類型的の趣向は次のやうである。

源賴光が世を去つて、賴義が武將となり、四天王も、子四天王が代つて（渡邊の綱の子竹綱、金時の子金平、卜部季武の子末宗、碓井定光の子定宗、平井保昌の子鬼童丸）大將を補佐する時代となつてゐる。ところが一方に、源氏を亡し朝廷を覆さうとする惡公家が、源氏の反對である平氏の腹惡き人物と結托して機を窺ふ。その眷屬中には鬼神・外道を驅使する者もある。かくて天變地妖が現れて、卜ひの結果妖怪の所爲と知れ、源氏の大將を召して退治を命ぜられる。大將の弓勢で怪物が空から墜落する。金平が踊りかかつて首を取る。御惱も晴れ、恩賞の沙汰がある、と同時に何某の蠢動の注進がある。源氏の大將命を受けて子四天王を率ゐて發向する。その留守に惡公家が內應して、一時は源氏の公達や御臺も都を遁れるといふやうな形勢になるが、結局竹綱の智謀と金平の目ざましき働きで惡人共は滅び、天下太平、源氏繁昌に終る。

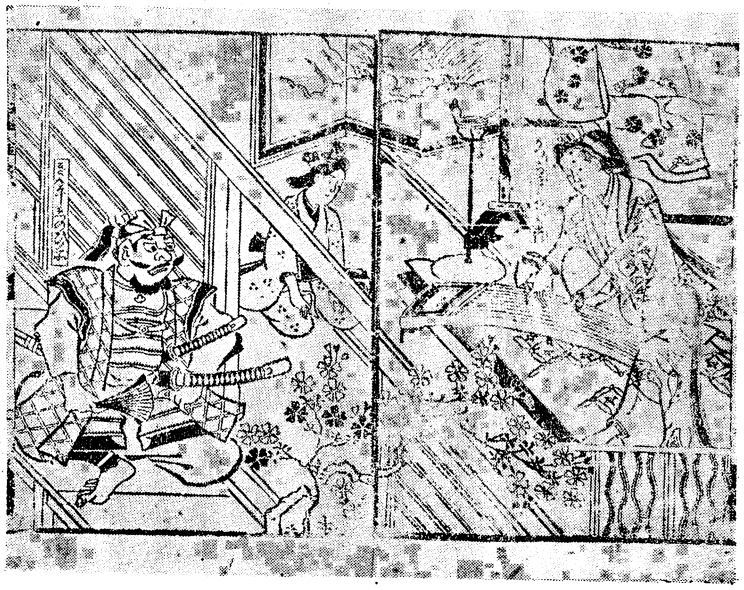


「金平が川」挿畫

蓋し公平物の中で活動する金平は、鞍馬山で二丈許もある顔の恐しい天狗の片羽を斬落したり（天狗羽打）、御所で劍の立花をし、紫宸殿上で三面の妖狐を仕止めたり（金平劍の立花）、頭は大象、胴は人間の高雄山の大天狗と格闘して降參させて名劍を得て、矢矧の橋上で千人切を行つたり（金平千人切）、川狩をして百八十間の鯨を始め鰐、しやち其他の魚龍を引つさらへて來る（化粧問答）やうな人物で、源家の武勇傳中の人物の武勇といふ武勇は一人で兼ね備へて居り、如何なる鬼神・妖魔・兇賊に對して敵一倍の勇氣を示すのである。併し武勇に誇り、剛情我慢、短慮一徹の爲に思はぬ不覺を取る。それ故、ワキ師として智者の竹綱が取合せられて居るといふ仕組になつてゐる。のみならず、金平は一面粗忽者で思はぬ失敗を演じて笑はれたり、又は賴義の次男加茂次郎と腰元柏の前との濡事を聞かされて、大夜具の中にくるまつて居りながら、「いやはや今時の子供に油斷はならぬ」と呆れると

いふやうな無邪氣さを持つて居る。そしてその最も不得手なのは文筆と色事である。そこで時代が下つて、金平物が元祿化して『金平戀之山入』（元祿初）、『金平歳旦發句』（元祿十一年）といふやうな道外金平物が生れて、この武骨者を濡事や風流韻事で困らせて、そこに一種の滑稽味を出した作も現れるに至つたのである。

要するに金平物は、彼の江戸初期の俠客列傳ともいふべき『關東血氣物語』の中の一人として載つて居る程、しかく豪快武俠の和泉太夫の人柄が、如實に表現された特殊の藝であつたと共に、それがやがて當代民衆に異常の興味と共鳴とを與へた武の讃



「金平戀之山入」挿繪

美・力の渇仰を極端に示したものといふべきであつたが、しかもそれが餘り極端であつた爲に、やがて永續性に乏しかつた。とはいへその影響は非常に大で、江戸は勿論、上方に於てさへ、寛文期に於ては、淨瑠璃は一時金平物または金平式のものが全盛を極めた程であつた。のみならず、その影響は後にも及んで、歌舞伎の荒事となり、義太夫の時代物中に出る曾我五郎や朝比奈や、さては和藤内となつたと見ることが出來る。

（ロ）反逆物

次は反逆物であるが、今ここに反逆物といふのは、天下を覆さうとする惡人の陰謀によつて起る種々の葛藤を作の主要な筋として、これに忠臣・勇士等の活動を配合させたのをいふのであるが、金平物にも見方によればこの種の作意も相當に見られるが、殊に王代物にこの種の作が多い。卽ち惡公家などの惡人が天下を覆さうと企むものであつて、『平安城都遷』の如きはその適例であらう。本曲は宇治加賀掾の正本で、延寶九年の『大竹集』に見えて居るからそれ迄の作と考へられ、作者は近松と推定される。五段から成り、大納言川繼やト部竹良等が共謀して、長岡へ遷都の際不都合を働き、上は難を近江に避けて、伊吹山麓の伊吹監物忠國（近江前司盛行の子）の許に御身を寄せられる。都なる惡人は惡逆の限りを極めるが、結局佛罰によつ

て自滅し、上は傳教大師と共々に平安城に入られるといふ大筋である。これがこの期の反逆物の一典型で、反逆の中心人物は、全く惡の權化ともいふべくして、實に惡逆無道の限りをつくし、しかも萬夫不敵の勇力を具備する點に於て、金平物の變體たる性質を持つて居るのが、古淨瑠璃に於ける反逆物の惡人の一特徴である。而してこの特性は元祿期に入つての王代物中の反逆物たる『大職冠』の入鹿、『浦島年代記』の圓大臣、などにもこれを見る處で、その典型的人物は既にこの期間に見られるといつて差支ない。又その段取りも、人物の配合も、粗と精との差はあるが、大體同一樣式であるといへる。而してこの反逆物を、武家時代の出來事として取扱ふ場合に、それが多くはお家騷動の形式を取る事はいふ迄もない。

(八) 敵討物

第三に敵討物としては、今期に於て曾我物も相當に取扱はれて居るやうであるが、これは左程勝れたものはなく、却て他の作に注目すべきものがある。例へば虎屋小源太夫の正本『鹽谷小次郎夜討對決』(延寶天和頃)の如きものである。本曲は納見判官のために謀殺されてその戰功を奪はれた弟の鹽谷小文次といふ出雲の大名の一子小次郎は、忠臣由良源內・駒王父子及び小文次と共に熱田の海にて恨を含んで溺死した郎等の遺子十八人と共に、敵納見判官の館を襲うて、

その臥床に判官を討つて、本領に安堵するといふ筋である。

水谷氏も言つてゐるやうに、義士物の嚆矢たる『碁盤太平記』の作中の主要人物の鹽谷判官・大星由良之助等の名は本曲に暗示を得たものかも知れない。また『阿漕の平次』の如きも、一種の敵討物と見られる。即ち、

丹波の國天田の城主山吹將監の家老村上勘解由之介行春と、將監の妹近姫と相思の仲であつたのを、同僚の荒川伊達右衞門が嫉んで、二人の仲を割いて姫を手に入れようとして、これを拒む將監を弑し、村上邸を圍む。村上は姫と共に遁れ、姫の傅隼人之介の働きで伊勢路へ落ちのびる。かくて行春は伊勢の阿濃郡島ケ崎に落ちついて浦人となり、名を阿漕平次と改めて年月を送り、既に十二になる竹姫と七つになる友若との二子がある。生計に窮して阿漕浦の殺生禁斷の場所へ網を入れてゐたことが知れて捕へられ、簀卷にされて海へ沈められ、母子三人は追放された。西蓮と改名して廻國してゐた隼人之介が、この浦へ來て平次の亡靈に逢ひ、妻子の所在を告げられ、また片見の袖を渡される。西蓮は大和の春日の里に露命をつなぐ竹姫母子にめぐり逢ひ、その手引で計略を以て荒川を討つて、父の敵を報じるといふ筋である。

また『柏崎』もさうであつて、攝津の大名入間左衞門が鎌倉在番中謀叛を企てて、越後の大名柏崎清政を說いたが、同意しないので謀殺する。爲に清政の妻子は流浪して人買の毒手にかかり具に辛酸を嘗めたが、忠臣小太郎・小次郎兄弟及び義士秩父十郎の力によつて、入間左衞

門を討つて本領に安堵するといふ筋である。また『十六夜物語』の復讐の如きは稍ゝ構想が別であつて、復讐事件そのものは、大筋の上の一つの場面に過ぎないやうに取扱はれて居る。要するに復讐物は、時代精神の一反映であると共に、劇的資材として絶好のものの一であるので、次第に流行の傾向を見せ、元祿期に入つては淨瑠璃にも歌舞伎にもそれがいよいよ行はれるのみならず、更に年と共に盛んになるのである。

(三) 宗教物

次に、靈驗・緣起等を取扱つた宗教物について見るに、前期の作に比してこの主想が方便的となつたと見られるものが先づ目につく。卽ち、神佛の靈驗を宗教的の意味に於て敍述・描寫するよりは、寧ろその奇瑞を利用して舞臺的技巧に人の目を驚かし、心を奪はうといふ方便として用ゐられたものの多いことである。これは人形劇に次第に手妻やからくりの勢力が侵入するやうになつた自然の結果として、超人間的の働きを示して見物の好奇心をそそる場合に、これを神佛の靈驗として仕組むといふ當代に於ては、操人形の效果を大ならしめる上に最も賢明な手段を用ゐた結果である。また寺院の開帳・宗祖の遠忌などを當込むことが多くなつた。これも亦人氣を集める上からと、作の大團圓を比較的光明的にし、神聖崇嚴にし得ると共に、見

物に對しては開帳といふ聯想上の實感を與へ得る便宜があつたからであらう。當代の開帳・遠忌は、信仰に基づくのみならずして、寧ろ一面太平の餘澤を享樂する行樂・行事的氣分に基づいたものであつた爲に、これが自然興行物にも影響したものと考へられる。而してこの手段は元祿期に及んで、開帳・遠忌の流行と共に、人形劇のみならず歌舞伎劇に於てはいよいよ盛んとなつた。『いろは物語』が、貞享元年三月京都の東寺に於て行はれた弘法大師の八百五十年忌を當込んで、弘法大師の偉業・奇蹟と、いろはの前と光照の戀物語とを取合せた作意であるが如きはその一代表である。又、天和三年二月の三井寺開帳を當込んで作つた『京わらんべ』は、三井寺の開祖智證大師と弟子證空房との子寺の情誼に、同寺の泣不動の由來を取合せたるが如きもその一例であるが、是等は單に方便といふよりも、一層宗教的色彩が濃くなつてゐる。

「京わらんべ」挿畫

また、宗祖の傳記や、佛教上に著名な人々の事蹟などを主材としたもので、宗教的性質を濃厚に持つてゐる作品も少くはない。件の『京わらんべ』のほか一二例をあげれば、善光寺の緣起を主とした『善光寺』（延寶六年角太夫）、釋迦の傳記たる『釋迦八相記』（寛文九年流未詳）、我が國に於ける佛法最初の保護者たる『聖德太子御傳記』（天和元年三月）などその一例である。この場合には、大抵『善光寺』に見るやうに、佛教の信仰者・保護者にして閻浮提金の尊像の歸依者たる、印度に於ける月蓋長者とその化身ともいふべき本田善光に對して、佛敵たる提婆とその化現たる矢田藤平、または守屋大臣の如きを點出して相爭はしめ、結局、外道・惡魔は滅びて佛法が繁昌し、國土安穩・萬民幸福といふに終る筋がその原型である。また『三社託宣』は、女主人公照日の前が伊勢・石清水・春日三社の靈驗によつて危難を免れる奇瑞を主想としたもので、神明の奇瑞を取扱つた一代表作であり、この類型のものも少くはない。その他宗教的色彩を帶びたものは山本土佐掾等の如き軟派語物には甚だ多く、一面から見れば、古淨瑠璃特有の宗教的臭味・色彩は大抵の作にあらはれてゐる。

次にこれと聯關して、同じく宗教的色彩の比較的多い說經の系統に屬するものはどうであるかといふに、これは前期に於ては、人買物型である山椒太夫系のものが多く行はれたのに對し

て、本期に於ても岡本文彌の正本『山椒太夫』、角太夫の『都志王丸』の如きがあつて、後に及ぼした影響が大きいと共に、その外に『苅萱』・『信田妻』・『愛護若』・『小栗判官』の如き、それぞれ操式の異るものが、取入れられて佳作を出し、而もこれ亦後世に大きな影響を及ぼした點は、最も注目すべきである。善光寺の親子地藏の緣起を主想とした說經の『せつきやうかるかや』（寬永八年四月刊）は、寬文二年八月刊の流派不詳の正本『苅萱道心』となつて、やや淨瑠璃化されてゐるが、これらは後の苅萱の戲曲の原型をなすもので、注目すべき作である。『苅萱道心』は、次のやうな筋である。筑紫の大守加藤繁氏は、廿一歲の時盃に花びらの散り込むを見て飛花落葉の無情を悟り、懷妊中の十九歲の御臺と三歲の娘とを置いて出家し、黑谷の法然上人の弟子となつて、苅萱道心といふ。出家の際七ヶ月目であつた胎內の兒は生長して、石童丸と名のる。その十三歲の時母と共に黑谷に尋ね行く。苅萱は夢に之を知り、これより先、女人禁制の高野山に入る。學文路の宿に御臺は止り、石童丸一人山へ尋ね上る。苅萱は名乘らない。その間に母は悶死し、石童丸は一人歸國したが、國に殘した姉も待ちわびて死んで了つたので、石童丸は再び高野に上り、苅萱の弟子となつて道念坊と名のる。のち苅萱は信州善光寺の右手に庵住して八十三で世を去り、同時に道念も高野山で六十三で大往生をとげ、善光寺に親子地

藏としてまつられるといふ筋である。この作の高野山で石童丸と苅萱とが出合ふ場面は、近松の『戀塚物語』の四段目の渡入道が爲若に名乘らぬ場面や、『いろは物語』の光照といろはの前の出合ひの場面に轉用され、更に後には『苅萱』山の段となるのである。延寶二年四月刊行の『葛の葉道心』といふ流派未詳の正本はこの改作で、山城葛葉の里の篠塚六郎左衞門は、春の花見の夕暮に散る花を見て一念發起して妻子を捨て、出家するのであり、また延寶・天和頃の刊行と思はれる『嵯峨釋迦御身拭』と題する流派不明（或は說經か）の正本には、梅津少將が、日ごろ睦しく見えて居た本妻と妾とが枕を並べて寢入りたるを見れば、頭髮蛇と化して相爭ふを見て、內面如夜叉の理を悟つて出家するといふ仕組になつてゐて、これも苅萱の類型であるが、これは一遍上人の繪傳記にある物語を傳へたもので、この双方の趣向を取合せたのが後の苅萱出家の動機となるのである。また山本土佐掾の『石童丸』、宇治加賀掾の『苅萱道心物語』等もこれより出たものと見て誤りなからう。

出家の動機は兎に角、『平家物語』の瀧口に見るやうに、一旦出家した道心者が、在俗の血緣の者に名乘らないといふ宗敎的苦悶を示す主想は、中世に於ては相當深刻な問題として取扱はれたもので、この系統を引いたのが『苅萱』で、『念佛往生記』・『大原問答』・『いろは物語』等

も亦内容に於て思想的に類型であるといつてよい。

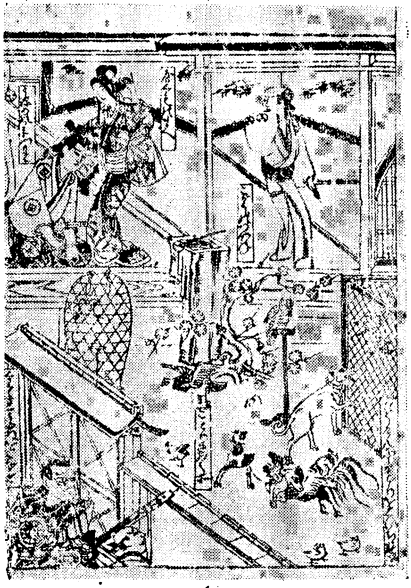
（ホ）精魂物

この種の主想は、動植物の精魂の化現が人間と契るといふ、自然神話の形式の一代表的のもので、動植物の精魂の化現と人間とが、或機縁によつて相契つて子まで儲けるといふのであつて、見方によつては超人間的の汎神的世界觀が背景をなして居るとも考へられるが、それは決して永久的の存在ではなくて、必ず或動機の下に生別離の悲しみを嘗めねばならぬといふ點に人畜の差別觀が現れて居る。『信田妻』はこの矛盾に基づく葛藤が作の頂點となつてゐるのであるが、その葛藤たるや人相互の間に起る葛藤とは異る趣を有する宿命的・先天的のもので、ここに一種の超現實・非人生的の幻想を伴ふ。これが音樂と人形とを主要な構成要素とする人形劇として特殊の存在價値を有つ有力なる一原因であつて、柳の精靈と契つた『三十三間堂棟由來』、鷹の精魂の化現と契つた『百合若』などがやはりその一形式であるが、代表的のものは信田森の白狐と安倍保名と契つて晴明を生んだが、後に古巣に歸つたといふ傳說に基づく『信田妻』卽ち、『葛の葉』の戲曲である。勿論これは早く說經によつて世に知られ、それを山本土佐掾の方にて『信太妻』として語つたのであるが、これは本期に於けるその代表的作品である

と共に、又この系統の戯曲の原據をなす作品である（大東名著選『近松以後』參照）。

（八）人情物

最後に、人情物、殊に戀愛を扱つたものを見るに、今期の作中殊に注目すべきは、王朝時代の女性の戀を取扱つたものの多い事で、是等はすべて戀に生きて戀に死ぬ、所謂戀愛至上主義のものの面影を示すものが少くない。殊にそれは宇治加賀掾の正本中、近松の青年時代の作と推定せらるるものに多い。『藍染川』の辨の君、『以呂波物語』のいろはの前、『瀧口横笛』の横笛かるもの如きその一例である。殊に、『東山殿子日遊』の將軍義政の姫君八雲の前が細川勝元に操を立て通すに對して、畠山持國の女初霜が身代りとなる趣向に至つては、後の献身犧牲の先驅をなすものであり、また『忠臣身替物語』と共に身代り物の一代表作といへる。それと共に、三角關係に基づく强烈な嫉妬を主想とした所謂うはなり



畫挿「東山殿子日遊」

物もある。その代表作は『花山院后諍』で、『葵の上』の如きも亦その一例である。而して『赤染衞門榮花物語』の僧侶の戀の執念を取扱つたものは、殊に注目に値すると思ふが、これは戀の執念の一變態で、『一心二河白道』その他のいはゆる清玄物として、後に大きな影響を及ぼしてゐる。また、『靜法樂舞』や『世繼曾我』などの如く、遊里情調を描いた場面の加へられた作も、今期の終りに現れたことも元祿期の先驅をなすものといふべく、『門出八島』に男色をにほはし、義經は戰場の名將たるのみならず、色道の勇者たる面影も既に今期の終りの作にはあらはれてゐるが、これは『十二段草子』以來の傳說に基づくものと見られる。

なほ、ここにつけ加へるべきは、『愛護若』であらう。『愛護若』は梅若丸・俊德丸などと共に說經の稚兒物の一であるが、年若き繼母が、形式的なる母といふ名目のみによつては拘束し難き人間の本能的の性情に打克ち得ずして、名儀上の我が子に對して、所謂道ならぬ戀をする爲に人生の葛藤を生み悲劇に終るを以て主想とするのであつて、人生の形式的方面の缺陷を穿つた作意であるが、說經では、これを日吉山王權現の起原に結びつけてある。寶永五年刊行の江戸の天滿八太夫の說經の正本『愛護若』は刊年は新しいが、作意は說經の原形を傳へたものと見るべく、寬文年間の刊行と思はるる流派未詳の正本『あいごの若』も亦殆んど同一の筋立

で、ただ結末が多少異るのみである。山本土佐掾の正本『愛子若』も恐らくは類似のものであらう（大東名著選『近松以後』参照）。